

談 話 室

第 31 回日本眼科学会専門医認定試験を終えて

令和最初の眼科専門医試験が、令和元年 6 月 7 日(金)と 8 日(土)の 2 日間にわたり、例年通り渋谷道玄坂のフォーラム 8 で行われました。日本専門医機構が眼科入局定員を毎年変更してきている昨今ですが、本認定試験は、眼科医の質向上を目指して、30 年にわたる経験を踏まえて、日本眼科学会専門医制度委員会の先生を中心に 1 年近くにわたって準備されました。今回も無事に終了しましたので、ここに報告いたします。

1. 概 要

試験前日の 6 月 6 日の夕方に最終打ち合わせ会と会場点検を行い、7 日と 8 日に試験を実施し、9 日に判定会議を行いました。例年通り、試験初日は筆記試験で、午前 9 時 30 分から一般問題を、午後 1 時から臨床実地問題をそれぞれ 2 時間かけて行いました。2 日目は午前 9 時から午後 1 時 30 分にかけて口頭試問を受験者 1 名に対して試問委員 2 名が面接官を担当して、各 15 分程度をかけ実施しました。

2. 受 験 者 数

受験申請の受理者数は 306 名でしたが、当日の欠席者は 9 名で、最終的に 297 名(男性 179 名、女性 118 名)が受験しました。昨年の最終受験者は 298 名ですので、過去 3 年続けて増加傾向にありましたが、今回は昨年より 1 名減少しました。ちなみに、これまで受験者が最も多かったのは第 19 回の 592 名です。新医師臨床研修制度が始まった影響で第 21 回目以降は激減し、第 28 回が 248 名で第 1 回に次いで少ない受験者数でした。なお今年の受験者のうち、初回受験者は 243 名(81.8%)、再受験者は 54 名(18.2%)で、その比率も昨年より初回受験者が若干減少しました。

3. 問題数、平均点、合否判定、合格率、ほか

筆記試験は一般問題 100 題、視覚素材付きの臨床実地問題 50 題の合計 150 題で行いました。試験終了後、KV(key validation)委員会を開催し、正答率と識別指数を参考に問題の妥当性を検討しました。その結果、識別指数がマイナスとなる問題がなく、不適切とされた問題はありませんでした。識別指数マイナス問題がないというのは画期的でした。一般問題と臨床実地問題をそれぞれ 100 点満点として換算し、両者の合計を 200 点満点として採点しました。採点結果と過去 2 年

表 1 筆記試験成績

		最高点	最低点	平均点
一般問題	第 31 回	86.0	30.0	63.4
	第 30 回	91.9	32.3	67.1
	第 29 回	86.9	28.3	65.5
臨床実地問題	第 31 回	94.0	36.0	68.2
	第 30 回	92.0	36.0	72.2
	第 29 回	90.0	40.0	71.3
総合	第 31 回	177.0	71.0	131.6
	第 30 回	177.9	68.3	139.3
	第 29 回	172.9	76.3	136.8

間の結果を表 1 に示します。過去 2 年より、一般問題も臨床実地問題も平均点は下回りました。

2 日目の口頭試問は 2 問を課題としました。試問前夜に試問委員が集合し、当日の手順を確認しました。そして、当日の早朝 7 時に再び集合し、委員長と副委員長で準備した問題を初めて試問委員全員に開示しました。副委員長から試問の目的、課題内容や採点基準などの試問の具体的方法を説明していただきました。そのうえで、試問の妥当性や採点の客観性などについて試問委員全員で討議し、合否判定基準について委員全員のコンセンサスを得ました。試問の判定は試問終了後に面接官 2 名が合議した結果を判定基準結果として提出していただき、翌日の判定会議で各班の班長から総評と不合格者の内容に関して説明をいただき、試験委員会委員長、副委員長、委員長補佐とともに各班の提出結果について面接官による不公平がなくなるように討議が行われ、最終的な合否判定がなされました。

合格基準は例年通りで、筆記試験が 200 点満点の 120 点以上を獲得し、口頭試問にも合格することとしました。今回の合格者は 220 名、合格率は 74.1% で、過去 3 年より合格率は下がりました。新受験者の合格率は 83.1%、再受験者の合格率は 33.3% でした。表 2 に男女別の合格率を示します。女性の合格率は男性よりも良好です。表 3 に最近 3 年間の合格率の比較を示します。

4. 筆記試験問題

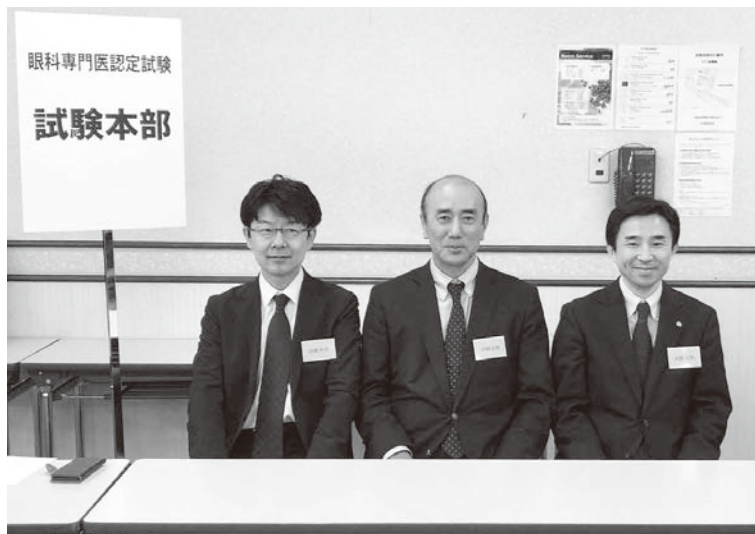
試験問題の作成は、毎年、全国の指導的立場におら

表 2 男女別合格者数・合格率

	男性	女性	計
受験者数	179名	118名	297名
合格者数	128名	92名	220名
合格率	71.5%	78.0%	74.1%
初回受験者数	143名	100名	243名
合格者数	116名	86名	202名
合格率	81.1%	86.0%	83.1%
再受験者数	36名	18名	54名
合格者数	12名	6名	18名
合格率	33.3%	33.3%	33.3%

表 3 最近3年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
29	2017	91.2%	52.2%	82.0%
30	2018	86.1%	42.6%	79.2%
31	2019	83.1%	33.3%	74.1%



専門医試験終了後に、高橋寛二副委員長，近藤峰生委員長補佐とともにKV(key validation)委員会を開催し、識別指数がマイナスとなる問題がなく、不適切問題もなかったことに喜ぶ。

れる約80名の出題委員に依頼し、一般問題2題以上、臨床実地問題3題以上の作成をお願いしています。ご多忙の中で、出題して下さった先生方には心より御礼申し上げます。

そして、専門医制度試験委員会の先生方ならびに副委員長と毎年6回(2回の1泊2日の合宿を含む)にわたり集合して、候補問題を抽出し、討議を重ねてブラッシュアップ作業を行い良問作成に努めました。試験委員会は出題基準に基づいた各専門分野の委員で構成されています。各専門分野の指導的立場に立つ先生方が集合して実施する2回の合宿では、質問の妥当性、解答の確認、文言の訂正、出題基準との整合性、現実の臨床現場での普及度などを熱心に吟味しながら、一問一問を討議します。作問をしていただいても、数年以内にはほぼ同じ内容が出題されていたり、他の作問と類似であったり、内容が「眼科専門医認定試験出題基準(ガイドライン)」に含まれていなかった

り、答えの選択肢の重みが異なったりして、採用されない場合もあります。試験委員の先生方が、眼科専門医の質確保を求めて良問作成のために非常に努力していただいている、本当に頭が下がる思いです。

毎回、眼科医としての基本となる屈折関係や斜視に関する問題は数題出題されていますが、これらの正答率はかなり高く、受験者がよく勉強されていることが推察されました。一方、解剖、生理の知識を問う問題の正解率が低い印象でした。今回は、眼科臨床研究に必要な疫学的な問題も出題しました。この3年間の合格率の比較から、今回はやや難問が増えたのかもしれませんが。

5. 口頭試問

口頭試問は、眼科専門医としての経験、知識、態度に関して、筆記試験を補完することを目的に実施します。その目的に適うように試験委員の先生に出題を依頼しました。提出していただいた問題の中から2題を

選択して、15 分間の試問に適應するように修正して合格基準を設けました。

今回の問題 1 は、眼底観察用の接触型 3 面鏡の使用法と落屑症候群の細隙灯顕微鏡と隅角所見の読影に関する質問でした。眼科医として基本的な検査と読影ですが、多くの受験者が接触型 3 面鏡を実際に使用していないことや正確な隅角所見の読影がなされていないことが分かりました。合格基準はクリアしましたが、白内障手術を何百件も執刀していながら、接触型 3 面鏡を見たこともない受験者もいました。

問題 2 は、黄斑上膜の眼底写真と光干渉断層計 (OCT) 所見を読影し、頻度の高い本疾患に関して、どのように病態や治療法を説明するかを問う課題でした。OCT 所見のない眼底写真の読影で、黄斑上膜の所見を疑えない受験者が少なくないことに驚きました。OCT 写真が出るや否やほぼ全員が黄斑上膜と診断できることから、OCT が如何に眼科診療に影響しているかを実感するとともに、丁寧な眼底写真の読影教育が甘いことを実感しました。また、頻度の高い黄斑上膜手術のインフォームドコンセントに関する問題で、日ごろの臨床態度や経験を推察することができ、筆記試験を補完する口頭試問問題として適当であったと考えられました。

口頭試問の受験者の応答結果を専門医研修施設にフィードバックすることも重要であると感じました。

6. おわりに

筆記試験の各専門領域の正答率から、受験者は専門医試験の傾向を意識して準備していて、本試験が眼科専門医資格試験の質保障のために重要であることを再認識しました。また口頭試問の結果から、隅角や眼底写真の基本的な読影がおろそかにされている印象も受けました。OCT などの画像診断の進歩により、日常臨床の全体の質は向上しますが、従来眼科検査で得られる所見を見落とす可能性が危惧され、研修施設などで本試験結果を検討していただくことも重要であると感じました。

専門医認定試験のために良問を作成することが、如何に大変であるかを、この数年間に本事業に参加して痛感いたしました。受験者はもちろん大変ですが、問題を準備し合否判定する側もかなりの労力を必要とします。作問していただいた先生方、そして、多くの時間を費やして良問までの完成に努力して下さった試験委員の先生方に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。専門医制度の本来の目標が、眼科医の質の確保であり、そのために、専門医認定試験の役割は大切です。本事業にご協力いただくことは、眼科医が社会に貢献するための大きな任務の一つであると感じております。今後とも皆様のご支援をお願いいたします。

最後に、副委員長として大きく支えて下さった高橋寛二先生、委員長補佐の近藤峰生先生、そして日本眼科学会事務局の皆様にご心より御礼を申し上げます。

平形 明人
日本眼科学会専門医制度委員会
試験委員会委員長